

日本型アイドル養成団体の受容・現地化とファンコミュニティの インフォーマル学習的意義について

—上海における参与観察を中心に—

登坂 学

Reception and localization of Japanese-style idol training groups in Shanghai, and the
significance of informal education among fan communities

Manabu TOSAKA

Abstract

The purpose of this paper is to consider to the cultural influence of globalized entertainment. Using the example of Japanese-style idol training groups that have expanded into China, as well as the activities of their fan communities, we looked at the non-formal educational aspects of their activities that are the key points of this study. For this purpose, the authors have been gathering data and observing participants in Shanghai for a number of years. In Section 1, the authors provide their responses to questions and points of criticism raised in investigative and study groups both inside and outside school, and discuss the intellectual framework of this study. In Section 2, based on materials gathered online and locally, a detailed study is made of the activities of fans and their independently organized support groups. In Section 3, we present a study on the significance of fan activities for individual fans, based on transcripts of interviews with fans of relevant idol groups, to conduct an analysis from a more detailed perspective. Through this process, our findings indicate that being a fan of an idol—an activity that can be viewed as simply a “leisure-time activity for geeks” —actually promotes self-development though its social activities, and has significance in terms of lifelong learning.

Key words : Participant observation, informal education, self-development, fan community, Sense of belonging

キーワード : インフォーマル教育, 自己形成, ファンコミュニティ, 居場所

はじめに

本稿の目的を簡潔に述べるならば、海外進出する日本型アイドル養成団体の文化的影響を、ファンコミュニティの持つインフォーマル教育（学習）の側面に注目しつつ検証しようとしてみるものである。そのため筆者はこの数年間、上海における資料収集と参与観察を重ね、途中経過を報告してきた¹⁾。

当該団体は2012年の計画・募集段階からすでに6年が過ぎようとしている。16年にはビジネス上のトラブルから日本のAKBより公式姉妹グループとしての契約

を解消されたものの、SNHグループは2018年8月現在、旗艦グループであるSNH48はS II、N II、H II、X、Ftの5つのチームを抱え、更に中国全土にBEJ48(北京)、GNZ48(広州市)、SHY48(瀋陽市)、CKG48(重慶市)と独自の姉妹グループを展開する勢いとなっている。この状況を見るに、日本型アイドル養成団体は、本土化（現地化）を果たしつつ中国の若者に受け入れられつつあるというのがこれまでの参与観察における実感である。

筆者は、一見するとマニアックな一部「オタク」に支持されるサブカルチャーであり、完全な「趣味」の領域にあり、教育や学習などとは関係の薄い事象とみら

れがちなアイドルグループ及びその周辺に生成するファンコミュニティであっても、そこには若者の学びや育ちがあるのではないかと仮説を立て、それを実証しようとしてきた。

本研究テーマを構想するにあたり、エンターテインメントの分野における特定芸能団体及び芸能人のファンコミュニティに関する先行研究として次の文献から少なからぬ示唆を得た。まず、宮本直美『宝塚ファンの社会学』である²⁾。著者は参与観察を通じてファンクラブの様々な活動を紹介、一見非合理に見えるファンの行動が合理的秩序を形成していることを明らかにした。単なるファンの集合に見えるものが実はスター形成に寄与していること、つまりファンがスターを作っていくとする著者の分析は参考になる。

今一つは、浅野智彦『趣味縁からはじまる社会参加』³⁾である。著者は趣味で繋がりあう若者を対象に質問紙調査を実施、私的な趣味の「つきあい」の中に、若者が政治や公共性に繋がる「秘かな通路」、即ちその可能性を見出そうとした。これは当事者の言葉でいえば「ヲタ活」の可能性ということであり、筆者がこれまで注目してきた視点と極めて親和性が高い。本稿はそれらの論点を中国における養成型アイドル団体及びファンクラブの持つ「教育的意義」に関連付けて検証しようとするものである。

このような観点から、本稿は次のように構成される。次節（第1節）は、これまで学内外の学会・検討会でも質問及び批判のあった論点を基に、筆者の反論も兼ね、本研究テーマの思想的枠組みを再構築したい。第2節ではウェブベースでの資料収集を基にしたファン及びその任意団体である応援会の活動について詳細に検証する。ここから応援活動という余暇活動の持つ生涯学習の側面があぶり出されるであろう。最終節（第3節）では前節を受け継ぎ、よりミクロ的視点で分析を行うため当該アイドルグループのファンへのインタビューを実施、その記録に基づいてファン活動が個人にとってどのような意味を持つのか検証する。

なお、ファンから見れば拙稿の内容は「何をいまさら」というような基礎的事項が多いことであろう。ただ、本稿は生涯学習の観点から中国青少年の余暇活動の一端を取り上げ、その特徴と教育的意義を考察しようとする試論であり、現場で生成する事象をアップ・トゥー・デートで把握・解釈しようとするアイドルファンの現地情報ではない点をお断り申しあげたい。



図1 「SNH48 星夢劇場」の外観（筆者撮影）。劇場の周囲は下町の雰囲気が残る低層の住宅と高層マンションが混在する地域である。

1 理論的枠組み

1-1 ノンフォーマル教育とインフォーマル教育

前述の趣味縁で繋がりあう若者集団の持つ社会的意義、とりわけその教育的意義の可能性——そもそもその有無を含めて——について論ずる前提として、経済協力開発機構（OECD）による教育形態の分類が重要になると考えられる⁴⁾。

まず、高度に制度化され、年齢によって構造化され、階層的に構成された、小学校から大学に至るまでの教育。実際には学校における教育を指す。これを「フォーマル教育」(Formal Education) と称する。次に、学校教育の枠組みの外で、特定の集団に対して一定の様式の学習を用意する、組織化され、体系化された（この点でインフォーマルエデュケーションと区別される）教育活動が存在するが、これを「ノンフォーマル教育」(Non-formal Education) と称する。最後に、あらゆる人々が、日常的経験や環境との触れ合いから、知識、技術、態度、識見を獲得し蓄積する、生涯にわたる過程。組織的、体系的教育ではなく、習俗的、無意図的な教育機能である。具体的には、家庭、職場、遊びの場で学ぶ、家族や友人の手本や態度から学ぶ、ラジオの聴取、映画・テレビの視聴を通じて学ぶなどがあげられる。これを「インフォーマル教育」と称する。

1-2 ノンフォーマル学習とインフォーマル学習

これらの教育について学習者を主体として再定義するならば、それぞれを「フォーマル学習」(Formal Learning)、「ノンフォーマル学習」(Non-formal Learning)、「インフォーマル学習」(Informal Learning) と称する。つまり、「組織化され、構造化された環境において発生し、明らかに（目標設定、時間、リソースの観点から）学習としてデザインされている学習」である

か、「学習（学習目標、学習時間、もしくは学習支援の観点から）としては明確にデザインされていないが、計画された活動に埋め込まれた学習」であるか、「仕事、家庭生活、余暇に関連した日常の活動の結果としての学習」であるかによって分類できるであろう。

OECDの定義を基にフォーマル学習とインフォーマル学習の相違点を整理するならば以下のようになる。フォーマル学習は意図的であり、学習は学問分野によってははっきりと構造化されており、カリキュラムははっきりと構造化され、国の規制が及び、提供者は公共機関または国からの認定を受け、質保証のメカニズムがある。それに対して、インフォーマル学習は意図的ではなく、学習や学問分野によって構造化されておらず、計画性や公式な区別のない学習あるいはそれに類するものであり、国の規制からは自由で開かれた市場にあり、市場参入制限のない民間提供者やボランティア組織によるものであるが、質保証のメカニズムはない。

我が国のケースに引き付けていうならば、ノンフォーマル学習には公民館等での講座、大学の公開講座、学校のクラブ活動での指導、企業の「off-the-job トレーニング」などが含まれ、これらは社会教育法による社会教育に位置づけられている活動と多くの部分で重なり合う。またインフォーマル教育（学習）にあつては、家庭内での親から子への教育や、企業内での「on-the-job トレーニング」など、より広範な活動に包含されるものといえる。

1-3 インフォーマル学習の意義

学生であれ社会人であれ、日常生活のなかで思わず「勉強させられた」と感じる出来事が多いに違いない。社会人であれば日々の仕事を通じて上司や同僚とコミュニケーションを取りつつ協力して結果を出そうとしている。顧客対応を巡ってはクレームに巻き込まれ苦しい思いをするかもしれないし、顧客と心が通い合い仕事の醍醐味を実感するかもしれない。学校に通う児童・生徒・学生であれば、同好会やサークル活動、インターネットのコミュニティ等の中で風波が発生し心労を伴う対応を余儀なくされるかもしれない。しかしそのような出来事に誠実に向かい合うことで、コミュニケーション能力や対人スキルが得られることも大いに考えられる。こうした状況はまさにインフォーマルな教育（学習）が機能したということである。

筆者の研究の根底にあるフレームワークが社会教育及び生涯学習の考え方に基づいているとすれば、教育と学習の場は決して学校内に留まるものではなく、社会生活のありとあらゆる場に広がっていると認識がある。そ

こでのキーワードが「インフォーマル学習」である。

この点ではまさに、赤尾勝己が「インフォーマル学習（informal learning）とは、家庭教育のような不定型教育（informal education）に対応した学習と、まったく教育に対応しない学びを包含し、「不定型学習」と和訳される。無意図的な学習、偶発的な学習（incidental learning）を含めて、人間の生涯を通して量的にも質的にも最も大きな割合を占めている」と述べ、その意義を評価していることとも合致すると考えられる⁵⁾。

1-4 ノンフォーマル教育（学習）及びインフォーマル教育（学習）から見た養成型アイドルグループとファンコミュニティ

ここまでの議論を本研究題目に引き付けて考察するならば次のようである。オーディションによって選抜され入団した少女たちは、運営会社により素質を認められ、将来の飛躍への可能性を秘めた人材とみなされている。入団後は上海市宝山区（上海市北部、長江の河口部南岸に位置する）にある生活センターと称する宿舎に原則として全員が住み込み、基礎的なトレーニングを連日受けることとなる。その内容は声楽、ダンスの基礎はもとより、健康管理、ファン対応やインターネットコンテンツとりわけSNSによる自己PRの方法の指導等、多岐にわたるが、これらを通じてメンバーはフォーマル教育では学べなかった芸能活動や芸能界のイロハを学んでいく。このように見ると入団・生活センター入所以降の運営会社によるトレーニングは、学校教育ではないが企業が一定の計画性と学習内容を整備・計画したうえで実施するものであるから、ノンフォーマル教育（学習）の一例であると考えられる。

さて、このようにして数か月が過ぎ、審査により技芸が一定レベルに達したと判断されたメンバーは、上海市虹口区にある星夢劇場に出演することとなる。その際のグループ分けは先輩が主体の正規チームであるチームS II・N II・H II・Xに配属になる場合もあれば、トレーニング生主体のチームであるチームFtに配属されることもある。もちろん技芸が一定水準に達しないと運営会社より見なされれば、レギュラーではないアンダー（控え）と位置づけられ、レギュラーメンバーが外務や体調不良の時などに穴を埋める形で出演する。ともあれ、劇場公演への出演を果たしたメンバーはファンとの接触が格段に増える。入団し生活センターでトレーニングを受けている時点で、既に多くのメンバーには固定のファンが付き、応援会も組織され始める。ステージ飛び出すや、ファンが準備したメンバーの名前やニックネームが大きく書かれた応援旗、お揃いのユニフォーム、マフラータ

オル、団扇、色とりどりのペンライト等が出迎え、ファンから歓迎のコールがかかる。AKB48の曲に「初日」という人気曲がある。この歌詞は新入生が苦しい練習を経て初日舞台を飾るまでを描写したものであるが、まさにその場面にいるのである。入団時期を問わず初舞台はすべてのメンバーにとっての初日であり、晴れてアイドルとしてチームに加わった感動が沸きあがるのである。



図2 劇場2階ロビーに掲げられたメンバー写真(筆者撮影)。5チームのメンバーの写真がチーム毎に掲示されている。図は1期生が中心のチームSIIである。

さらに言えば、生活センターは余暇時間を過ごす「居場所」である。その日常の中にも学びがたくさんあることは言うまでもない。メンバーは中学～大学生の年代、大部分が一人っ子である。集団生活の経験が浅く、宿舍生活特有の濃密な人間関係に慣れていないメンバーも多い。しかしチームに加わり芸能の路を目指す個性的な若者が人生を語り合い友情をはぐくみ、時には反発しあいはぶつかり合いながら人との付き合い方を学んでいくのである。その様子は運営の管理のもと各メンバーが更新する「微博」(ウェイボー:中国版ツイッター)を始めとするSNSや中継配信アプリ等でファンに報告される。

以上から、養成型アイドルグループの入団以来の活動は多分にノンフォーマル・インフォーマル教育的側面も有する取り組みであると思料される。

2 養成型アイドルグループに集まるファンとそのコミュニティ、両者のインタラクション

2-1 劇場公演にみる応援の様子

まず当該アイドルグループの活動の拠点である上海の劇場について簡単に描写しよう。客席の間取りは、最も舞台に近い(2m程度)立ち席、その後ろに雛壇状に連なるVIP席、普通席と続く。ファンの中でも最も熱心な常連は最前にある立ち席に陣取ることになる。定員は

300数十名、いわゆる小劇場であり、仮に最後列に座ったとしても演者の顔や表情がよく見え、ステージと客席の距離は非常に近い印象である。

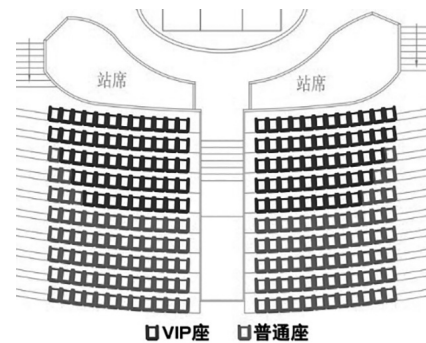


図3 客席見取り図(公式ウェブサイトより)⁶⁾



図4 客席前列(VIP席)、ステージに向かって右側から見たステージ(筆者撮影)。座席と立ち席を隔てる欄干には、各メンバーの応援会の応援旗が掛けられている。

SNH48の星夢劇場を例にとれば、公演は一般に水曜から日曜の5日間、平日は夜の1公演、土日は夜昼の2公演が行われる。2018年夏現在、週末に係る人気チームの公演、生誕祭(後述)等特別公演は予約時の抽選制が採られており応募しても落選となることがよくあるが、それ以外は高確率で入手できる状況である。席はエントランスロビーに据え付けられた発券機により抽選で決められるので最後まで分からないが、熱心なファンほど前列を所望する傾向があるため、発券開始から入場までの数時間で、ファン同士によるチケットの交換(金銭を伴うため実質的にチケット売買である)がごく普通に行われている。後方や端など良席ではなかったがどうしてもステージ近くで見たい場合、良席を入手したものの推しメンが出演しないので後ろや端の席でもよいというファンがいれば取引成立である。これらの情報交換及び取引はQQという中国で普及しているネット上のチャットシステムを駆使して行われている。

また、チケット入手を代行する業者も存在し、抽選制公演以外の先着順チケットを迅速・確実に入手できるよう特殊なパソコンソフトを用いてチケットを確保している。これらチケットの売買はグレーゾーンの行為であるが、多くのファンがこのような業者を利用しているし、運営会社も黙認している。その実、業者も大抵は当該グループのファンであり、得た利益はその多くが自分の「押し」のために費やされるのである。運営側も半ば黙認しているのが現状である。

さて、前稿でも述べた通り、ビジネス上のトラブルにより日本のAKBグループから契約を解消された当該グループは、目下オリジナルの楽曲でセットリストを組んで劇場公演を行っている。しかしオープニングは日本同様のオーバチュア（overture = 序曲：すべての48グループの公演前にかかる短い前奏曲の音源で、DJによる煽りが特徴的である）から始まるほか、アンコールの最後の一曲はAKBの人気曲を演じることも多く、日本の養成型アイドル団体の文化を受け継いでいることを観客に依然として意識させる。ファンの声援は日本よりも大きく、熱烈である。ファンが「ミックス」と称するAKBグループ特有の掛け声は、以下のように、1番は英語、2番は日本語、3番はアイヌ語で発声され、大声であればあるほど熱心で情熱的な応援であると評価される。中国語の訛りはあるものの、これらは寸分たがわず日本語で発声される⁷⁾。

あ〜〜よっしゃいくぞー!! 「タイガー、ファイヤー、サイバー、ファイバー、ダイバー、バイバー、ジャージャー」

あ〜〜もういっちょ行くぞー!! 「虎(とら) 火(ひ) 人造(じんぞう) 繊維(せんい) 海女(あま) 振動(しんどう) 化繊飛除去(かせんとびじょきよ)」

「チャペ、アペ、カラ、キナ、ララ、トゥスケ、ミョーホントゥスケ」

更に興味深いのは、ここ数年、日本の地下アイドルのライブ会場で発生しメジャーアイドルのライブにまで広く流布し使われている掛け声（ファンの間では「ガチ口上」と呼ばれている）がSNH48グループのライブ会場でも多用されることである。

言いたいことがあるんだよ やっぱり〇〇はかわいいよ
すきすき大好きやっぱ好き やっと見つけたお姫様
俺が生まれてきた理由 それはお前に出会うため
俺と一緒に人生歩もう 世界で一番愛してる
ア・イ・シ・テ・ルー!

日本語を解する中国人にこれを見せると、異口同音に「現実の恋愛では恥ずかしくてとても言えない」と感想を述べる。その実、日本人も同様の感覚だろう。あるファンは外国語である日本語ならば、敢えて恥ずかしいセリフでも言えるのだと筆者に語った。管見の限り、大方のファンは特に恋愛感情からこれらを叫んでいるのではなく（もちろん疑似恋愛に陥っている者もいるが）、もっぱら面白がっていたり、応援上の暗黙の了解であったり、或いは応援の一体感を醸成するための記号化した発声として共有していたりすると考えられる。また彼らが志向する日本由来のカルチャーを他のカルチャーと差別化するファンの潜在意識も働いているようにも見て取れる。

以上は日本のオタク文化の継承の事例といえるものであるが、その本土化・現地化という点では既に以下のような中国語バージョンが考案されているのが興味深い⁸⁾。

有一些 心里话 想要说给你

(お前に言いたい 本音があるんだ)

XXX 就是你 最可爱的你

(XXX お前なんだ 一番かわいいお前なんだ)

喜欢你 喜欢你 就是喜欢你

(お前が好きだ お前が好きだ お前がオンリーワンなんだ)

翻过山 越过山 你就是唯一

(山を越え海を越えても お前がオンリーワンなんだ)

有了你 生命里 全都是奇迹

(命の中に お前がいれば すべては奇跡だ)

失去你 不再有 燃烧的意义

(お前を失ったら もう二度と 燃え上がる意味はない)

让我们 再继续 绽放吧生命

(俺たちに 命を咲かせて続けてくれ)

全世界所有人里我最喜欢你

(世界のすべての人のなかで俺はお前が一番好きだ)

我最喜欢你

(お前が一番好きなんだ)

内容的には日本語版と大差ない。日本語バージョンの内容を解釈し、大意を変えぬようできる限り忠実に意識したものであると言って差し支えあるまい。同時に、情熱的な内容をうまく解釈し中国語の表現に置き換えていることから、これもファンなりに考えた外来文化の現地化の一例と言えよう。ただし日本語バージョンほど普及はしていないようだ。

現地化という点では更にメンバー紹介の際の「掛け声」にも現れる。48系の劇場ではオープニング曲（3-4曲）

が終わると全員が舞台上に整列して自己紹介が始まるが、その際、ファンからの掛け声に日本とは異なる傾向がみられる。日本では拍手と共に数名のファンからメンバー名やニックネームのコール、「かわいいよ！」等の声掛けがある程度である。しかし上海の劇場では、もっと大勢から声がかかり、しかも応援会が中心となり皆で声を合わせて漢詩（戯れ歌ではあるが、絶句や律詩の形式）を叫ぶのである。応援会幹部は少しでも印象に残るものを作ろうとしてこれを必死に考えるのだ。

例えば、以下は筆者が参与観察を続けているメンバーである馮薪朶（フォン・シンドウオ）さんの応援会の幹部が最近の傑作であると紹介してくれたものである⁹⁾。

温一壺月光下酒（月光を映す銚子で飲む酒も）

不及你浅笑回眸（あなたが微笑みながら振り返る顔には及ばない）

得笔下之城三千「筆下の街」（当該メンバーが歌っている楽曲のCD）を三千枚手に入れようとも）

不如你一笑展颜（あなたが微笑みながら振り返る顔には及ばない）

もう一つ、これも筆者が参与観察を続けている、メンバー徐晨辰（シュー・チェンチェン）さんの応援会幹部が紹介してくれたものを提示する¹⁰⁾。

一曲猎梦入心间（「ドリーム・ハンター」（当該メンバーの歌う曲）が心に沁み込み）

歌姬下凡梦也甜（ディーヴァ降臨の夢もまた甘し）

思你念你好多遍（幾度も幾度も君を想えば）

绝色佳人在眼前（絶世の美女が目の前にいる）

いずれの詩も推しメンの美しさを称えるものである。とりわけ後者などは脚韻を踏み、戯れ歌としてはなかなかの出来であると感じられる。そして何よりも「推し」に対する一途な愛慕の情が伝わってくる。これを作った幹部は北京在住であるが、メンバー徐さんの出演する公演が週末にかかると知れば、万難を排し夜行列車の2等車両に乗って上海にやってくるのである。彼女は民間企業のいちオフィスワーカーであるが、交通費を節約しても推しに対する金銭的・時間的支援は決して出し惜しみしない。彼女のこのような一途な気持ちが籠った歌だと実感できるのである。応援会の中心にいる幹部たちは「推しメン」への純粋な愛のもとに団結し、ボランティアで事務を分掌しつつ推しメンの地位向上のため日夜活動しているのである。



図5 「星夢カフェ」の入り口（筆者撮影）。入り口を入るとドリンクや軽食のカウンター、奥にはテーブルやいすがあり、小さなステージも設えてある。普段は開放され、ファン同士の情報交換の場になる他、不定期にメンバーの誕生会やミニライブ等のイベントが行われる。ファンにとって大切な居場所である。

2-2 ウェブベースでの応援とコミュニケーション

そもそも当該アイドル養成団体の活動がWebプラットフォームに大きく傾斜・立脚したものであり、各種告知や宣伝はもとよりチケット販売や物販、総選挙の投票を始めとする人気投票、新規ファン獲得等々は公式ウェブサイト及びスマートフォンの公式アプリ無しには成り立たないものである。言い換えればファンはそれらプラットフォームを通じてありとあらゆるサービスにアクセスすることが可能なのであり、それだけにファンは片時もスマホを手放さず、公式情報のチェックを欠かさない。

一方、応援会の最大の目的は自分たちの推しメンを支援することである。応援会の幹部や熱心な会員は日々お気に入りのアイドルのSNS更新をウォッチし、更新がなされるやすぐに「いいね」を押し、コメントする。またメンバーは様々な配信アプリを使って個別にお喋りやパフォーマンスの配信を行っているので、ファンはそのチェックも欠かさない。コメントしたり投げ銭（バーチャルの課金アイテムのプレゼント）したりと、メンバーの認知を勝ち取ろうとする。また推しメンが外務のため出張するとの情報を得るや、万障繰り合わせて空港や鉄道駅に見送り、出迎えのために馳せ参じるのである。もちろん普段の劇場公演におけるメンバーの入り待ち、出待ちも行われる。写真を撮る目的以外に、これもメンバーから認知されたいとの気持ちが働くことが大きいからである。

新規会員の獲得も応援会の重要な任務である。会員の多さはそのままアイドルの地位向上に繋がるので、各種投票活動に参加してくれるファンを束ねて堅固な会員組織を形成し、同時に新規ファンをより多く獲得し定着させるようとするのである。これらはQQ（キュキュ）や

微博（ウェイボー）、百度（バイドゥー）等のSNSを駆使してファンへコミュニティへの参加を呼び掛ける。

2-3 資金調達活動

メンバーにとって各年次の人気投票（以下、「総選挙」）は一大事である。メンバーは日常的に競争にさらされている。普段の劇場公演の人気投票、それを総合した劇場MVP、握手会での握手券獲得数、メンバー各自の公式ウェイボー（中国版ツイッター）のフォロー数等、様々な活動がすべて数値化された競争であり、それが運営会社によるメンバー評価の参考となっている。しかし、この総選挙は重みが全く違う。これによりその年度の自分の人気度が数値化され、給料をはじめ内務・外務を問わず仕事のオファー等、自分に対する特典や待遇が大きく変わってくるからである。当然ほとんどのメンバーは内心多くの投票を期待することになるのだが、メンバー本人からファンに対する投票の呼びかけは比較的抑制的である。彼女たちは自分を支持してくれるファンが自らと同じ若者世代であることをよく知っており、あまり無理をして通常の生活に支障をきたすことがないように気を遣うメンバーが多いからである。しかし、各メンバーの応援会はそんなメンバーの気持ちを汲んで、総選挙開票イベントの半年以上前から、一部の応援会は当該年度の総選挙が終わるとすぐに次の総選挙をにらんで自主的に選挙支援活動を開始する。

総選挙の投票券は選挙戦の開始に合わせて発売されるCDのパッケージに封入されており、応援会はそれを出来る限り大量に購入しようとする。これは個人でCDを購入し投票するのが主体となる日本とは様相が異なる。投票券の表面には数字・記号が羅列されたキーワードとQRコードが付されており、それを公式サイトで投票用ページで打ち込み送信したりスマートフォンの公式アプリ上でQRコードを読み取って送信したりすることで投票ができるシステムである。CDは種類によってメンバーの生写真と握手券と投票券が1枚ずつセットのものや、投票できる回数が16回分、48回分と多い投票カードが入ったものがある。このような販売方法では、日本と同様に写真や券類だけを抜き取ってCDが投棄される例が後を絶たず、資源愛惜や環境保護の見地から批判もある。

以上のようなCDを大量購入するため、各応援会は主に「摩点」（モーディエン）と称する中国版クラウドファンディングのアプリを使用して資金調達を行う。一般にクラウドファンディングは募金の趣旨や公共性、会計処理などの点で厳しい審査が行われるが、その点で摩点は緩く、総選挙の資金調達にも手軽に利用されてい

る。寄付を促進するためQQ（中国で使用者が多いチャットシステム）のファンルームでは寄付行為に連動してリアルタイムの自動配信で寄付額の報告が行われ、選挙活動の書き入れ時にはほぼその報告で埋め尽くされる。寄付者への福利として抽選による物品のプレゼント等も行われる。ファンルームの管理人は、寄付を呼びかけ、励まし、賞賛し、煽り続ける。最盛期にはまるで催眠商法の集団陶酔のような雰囲気を作り出す危うさも孕んでいるように見て取れる。ともあれ、このような資金調達活動はほぼ全額が投票に結び付き、それはそのまま運営会社の収入になるため、ファンの自主活動として黙認されている。なお、資金調達は淘宝（タオバオ）というネットショッピングのアプリを使用して、仮想商品を購入する形でも行われる。

2-4 「単推王」制度

これは中国の48独自の顕彰制度である。総選挙で投票するには二通りの方法がある。一つは先に述べたように、応援会がファンから資金調達をしたうえでまとまった額で投票券入りCDや投票券単体を大量購入し、不特定多数のファンを代表して投票する方法である。今一つは個人がそれらを購入して個人的に投票する方法である。「単推王」（たんおしおう＝ダントエイワン）とは、当該メンバーに最も数多くの投票をした者に与えられる称号である。単推王は応援会が獲得することもあれば、個人が獲得することもある。具体的数値は公表されていないが、ランクインメンバーの単推王になるためには、票数にして数千～数万票以上の票数が必要となる。日本円に換算すれば百数十万円～1千数百万円以上の大金である。現在の中国には、このような額を一人で払える若者も少なからずいるのである。さて、授与されるのは単に称号だけではなく、記念品等様々な特典もある。多くの熱心なファンは我こそが当該メンバーの最も熱心で有力なファンであると自負しているため、資金の続く限りの支援を惜しむことはない。このあたりが「オタク」のオタクたる所以かもしれない。次節を待って、多くの資金援助を実際に行っているファンの素顔を垣間見ることとする。

2-5 生誕祭

上海におけるフィールドワークの重要な目的の一つに劇場公演の見学がある。そこでは相当の確率でメンバーの「生誕祭」に立ち会うことになった。生誕祭とはメンバーの誕生日を祝う特別公演であり、運営会社にとってはこれ自体が集客の方法である一方、当該メンバーの応援会にとっては自らの存在意義と会の面目を賭けた大イベントとなる。筆者は2018年夏の滞在時

には8月12日のX隊公演で汪佳翎（ワン・ジャーリン）さんの生誕祭に立ち会った。たまたま筆者と応援会幹部は同じホテルに泊まり合わせた。応援会の会員たちは生誕祭のためにおよそ半年近くも前から寄付金を募り、劇場運営のスタッフと協議し、必用物品を制作・購入し、当日の段取りを考える。そして公演前日から劇場近くのビジネスホテルに泊まり込み、徹夜で応援グッズの入った「応援袋」の準備をするのである。当日はエントランスに当該メンバーの等身大写真の大きな立て看板が掲げられ、2階ロビーには豪華なデコレーションが設えられる。人気メンバーの応援会は資金調達力も強力で、その豪華さにおいては日本のグループの生誕公演を遥かに凌ぐ。面子を重んじる中国人の意向が反映していると思料される。下記の資料は生誕公演当日に来場者全員に配布された協力依頼のパンフレットを翻訳したものである。生誕公演とはいえ、公演を見に来る観客は当該メンバーのファンだけではない。そこで会場全体で祝賀の雰囲気醸成するため、以下のような協力依頼状は必須なのである。

あなたが汪佳翎と一緒に1か月遅れの19歳の誕生日をお祝いして下さることに感謝します。これは彼女がSNH48に入団してから4回目の生誕特別公演です。今日の応援が私たちにとって楽しい思い出になることを希望します。

【応援袋の中には何入っているのかな?】

サイリウムライト2本（黄色+青）

協力依頼状

中性ボールペン

お祝いのメッセージカード

透明な団扇

誕生日の応援のメッセージ布（〇〇〇お誕生日おめでとうと書かれた15cm×40cm程度の布）

小さなおやつ

公演の合間にあなたのお祝いの言葉を応援袋の中にあるカードに書いて、最後のハイタッチのとき汪佳翎に手渡してください。

【私たちがすべきこと】

1. 最初のMCで汪佳翎が自己紹介をするとき、黄色のサイリウムを点灯してください。自己紹介が済んだら「せーの」に続いて「汪佳翎（ワン・ジャーリン）、お誕生日おめでとう!」と叫んでください。
2. Ice Queenの曲の間は、静かに汪佳翎の歌声と美貌をお楽しみください。
3. 生誕特別コーナーのときに青色のサイリウムを点灯させ、汪佳翎のパフォーマンスに応援をお願いします。
4. 誕生日祝いコーナーでハッピーバースデーの曲が流れたら、メッセージ布を掲げ、一緒に歌を歌い、一緒に彼女の誕生日を祝って

ください。誕生日祝いコーナーが全て終わったとき、皆様、再度「汪佳翎!お誕生日おめでとう!」と叫んでください。

5. アンコールの呼びかけのとき、皆様と一緒に、汪佳翎の名前をコールし、彼女と仲間たちがステージに戻ってくるのを歓迎してください。

6. 後から2曲目の「新航路」の時に、最初のコール「虎火発動」の言葉を、1日限定で「九五（吾）至尊」と変え、汪姐さんへの敬愛の情を表してください。

以上、感謝申し上げます、彼女にご好意を頂けますよう希望いたします。

以上のように、生誕公演の企画とそれに先立つ準備には周到な心配りが見て取れる。応援会はこれらを細かい役割分担の上で進めていくのである。これらはまさに手弁当の取り組みであり、アイドルへの敬愛と熱意そして主体的な行動が無ければ続くものではない。応援会の若者たちにとって劇場やファンコミュニティとは、自らが同世代のアイドルに貢献できることを実感でき、自己肯定感を感じられる、かけがえのない居場所であり、アイデンティティの源泉と言えるだろう。



図6 生誕祭用応援旗およびメッセージ布。（筆者が収集、撮影）



図7 生誕祭協力依頼レター。（筆者が収集、撮影）

ではこれらファンコミュニティを構成する個々のファンにとって、アイドルの応援とは何であろうか。どのように考え、どのように行動しているのであろうか。そこにインフォーマルな学習は生じているのであろうか。次

節で詳細に検証しよう。

3 ファンの素顔

3-1 インタビューの方法及び手続き

本節では、2017年8月及び12月に実施した上海市虹口区におけるフィールドワークで実施したファンへのインタビューの検証を通じて、中国の若者の日本型アイドル養成団体とのコンタクトの状況やファンコミュニティの持つ可能性について考察することとしたい。インタビュー対象者はまず参与観察の過程において知り合ったファンにアプローチし依頼した。後にそのファンの紹介或いは筆者自身のインタビュー打診で対象者を広げていくスノーボール方式を採用している。インタビューはすべて中国語で、筆者の問いに対して答えてもらう形で進めていった。しかし用意した質問事項に拘泥せず、対話の流れを重視してファン自身の来歴を自由に回想して語ってもらうという、ある意味ライフストーリー法にも共通する手法を用いた。

内容的には趣味に関する比較的軽いものなのでインタビューは容易だと考えていたが、その実、このような趣味を持ちファン活動(ヲタ活)をしていること自体を他の友人や家族に知られたくないという人も多く、インタビューに積極的に応じてくれる人は意外と少なかった。これはリサーチを開始して判明したことある。2回の滞在を通じてインタビューできたのは10名程度であり、ある程度まとまった記録が取れたのは数件であった。

3-2 日系アイドル養成団体のファンに対するインタビュー

※傍線及び()内の記述は筆者による注釈である。

【事例1】

Aさん(女性、20代後半、福建省出身、大学院修士課程修了、SNH48の周辺商品等を販売するショップ経営者)

2017年8月16日(水) 15:30～ 於：上海市虹口区内某所

Q：AさんがAKBを応援するようになったきっかけを教えてください。

A：私がAKBのファンになったのは2011年です。あの時私は1人で上海にやってきて大学院に入学したのです。親戚や友だちは誰もいませんでした。当時すでに22歳だった私は、内心とても苦しく感じていました。でもAKBをみて、とくに彼女たちの歌に歌われているのが青春、学校、卒業であるのが分かりました。中国の歌謡曲はほとんどがラブソングですから。ああいった青春へのあこがれ、未来への憧憬といったものがみんな彼女たちの歌の中にあったのです。だからそれ以来AKBをみるようになったのです。いちばん好きなAKBの楽曲は「青春と気づかないまま」です。

Q：AKBを応援し始めたときは最初に誰のファンになりましたか？

A：大島優子さんです。

Q：大島さんのどんなところが好きですか？

A：舞台のうえで輝いているところですね。

Q：ああ、笑顔が可愛らしいですね。今でも好きですか？

A：ええ。

Q：どんな方法で大島さんを推した(応援した)のですか？

A：CDを買ったり、総選挙で投票したり、写真集を買ったり、握手会に行ったりしました。

Q：初めて握手をしたときどのようなことを思いましたか？

A：(恥ずかしそうに)日本語が分からないから、I'm from Shanghai.と言っただけで剥がされました(剥がされた=握手と会話の制限時間がきて係員から離れるように促された、の意)。

Q：時間が短すぎたのですね。

A：そうです。

Q：AKBに月平均でどれくらいお金をつぎ込んだか教えていただけますか？

A：月平均がどれくらいかは計算していないのでわかりませんが、全部で15万円(約255万円)くらいです。その後、SNHには40万円(約680万円)くらいです。

Q：えっ、そんなに多くですか！

A：(恥ずかしそうに)独身ですからまあ大丈夫です。

Q：たいしたものですね!まさにファンの鑑です。

A：いえいえ。

Q：大島優子さんを推し始めてから、あなたの人生観や日常生活にはどのような変化がありましたか？

A：それほど大きくは変わっていません。人生観はアイドルによって養成されるものではないからです。

A：ところで私の研究しているのがどのようなものかご覧になりたいですか？

Q：見てみたいです。

A：(書物を提示)

Q：子安宣邦こやすのぶくに(日本の政治思想学者)の著書ですね。

A：そうです。ですからアイドルのファンであると同時に、私が気にかけているのは、ファンコミュニティで起こる様々な事象に対し自分で考える能力なのです。

Q：ああ、そういえばあなたはファンコミュニティと一定の距離を保っていますね。自分で考え、自分で行動している…

A：そうです。

Q：自分の考えを持っている。

A：考えずして研究はできませんからね。

Q：あなたは先にAKBのファンになり、それからSNHのファンになったのですよね。上海にAKBの姉妹団体が設立されると聞いてどう思われましたか？

A：オフィシャルな団体ですからもちろん支持しました。2012年4

月21日に上海でSNH結成の会見があったとき私は会場にいたんですよ。

Q: そうでしたか。SNHでのあなたの一押しは?

A: Savoki (趙嘉敏) でした。

Q: まず Savoki を推して、のちにナナシ (馮薪柔) を推すようになったんですね。

A: Savoki が (SNH を) 卒業しちゃったから。(続いて Savoki が彼女の誕生日に送ったカードを見せてくれる)

Q: わあ、これはすごいですね!でもこの二人は個性が違うでしょう。どうして好きになったのか興味があります。

A: 舞台の上で輝いていたからです。

Q: 個性でなくて舞台での表現ですか?

A: 舞台の上でどうであるかが一番重要なのです。個性というならばアイドルと一般人はたいして違いませんから。

Q: あなたはダンスや歌唱など舞台でのパフォーマンスを重視するんですね。

A: そうです。

Q: AKB や SNH は日中友好にどのような役割を果たせると思いますか?

A: AKB は 2012 年に中日友好 30 周年の代表として上海に来ていますね。SNH は取り立てて役割は演じていません。

Q: これからはどうですか?

A: 難しいと思います。

Q: あなたはこの方面に割と悲観的なのでしょうか?たとえばあなたは AKB が好きで日本までやってきて、こじはる (小嶋陽菜) やマユユ (渡辺麻友) のコンサートを見ますよね…これも立派な交流では?

A: これはちょっと一方通行だということです。SNH ファンの日本人はどのみち少ないですし。AKB ファンの中国人は日本に行きたいと思っている人の数は多いのです。一方通行というのは基本的に中国人が日本に行くということです。

Q: 一方通行でもよいと思いますよ。アイドルを通じた交流が大切ですから。中国と日本どちらのアイドルに頼るのもよいと思います。

A: そうですね。中国のオタク文化圏においては日本の魅力は圧倒的です。アイドルやアニメ、漫画ですね。

Q: 私の見方は比較的楽観的です。これらアイドルやアニメ・漫画のお蔭で多くの中国の若い人が日本に注目し、日本に来てくれるのですから。来てくれれば、自然に市民との交流が生まれますから。

A: そうですね。私のいう悲観的とはあなたの言う SNH の役割のことなんです。

Q: 中国まで来て SNH を見る日本のファンは多くはありませんが、でも確実にいます。しかもとても熱心ですよ。

A: そうですね。います。ただ二者の基本的な数の差が大きすぎるのです。

Q: 話を聴かせていただいてありがとうございました。最後の質問

は少し抽象的ですが…あなたにとって劇場やアイドルとは何ですか?

A: 劇場は一つの社交のプラットフォームであり、アイドルとは信仰です。(以上)

A さんは AKB 楽曲の歌詞の内容に魅了されたようだ。青春、学校、卒業、未来への憧憬というキーワードが印象的である。実はこれこそ中国の学校生活で決定的に不足しているものなのだ。大学院修士課程修了という高学歴でありながら非常に熱心なファンでもあることに驚いたが、常に競争に晒される緊張感渴望感の癒しを AKB の表現する青春感覚に求めたとも考えられる。SNH に応援軸が移ってからも、舞台パフォーマンス重視の姿勢は変わらなかった。他方、ファンとしての一分を守り、アイドルにもファンコミュニティにも過剰に没入せず、距離を保ちつつ、しっかり自分をもって相対している点特徴的である。しかし自らの収入を投入して特定アイドルを大々的に支援する姿勢はぶれないものがある。彼女にとって劇場は社交の舞台だという。アイドルは信仰であるとともにファンコミュニティは是々非々の姿勢を堅持しつつ自らを鍛える試金石なのかもしれない。最後の、劇場は社交のプラットフォームであり、アイドルとは信仰、という言葉はファンの自己形成を考えるときに重要な論点となろう。

【事例2】

B さん (上海市出身、女性、20 代、大学卒、チケットの代理購入や SNH48 の周辺商品等を販売するショップ経営者)。

Q 筆者 (以下、「筆」): いつ、どのように AKB を知ったのですか?

A: 高校生の頃、2009 年でした。

Q: 古参のファンですね。最初は誰を推しましたか? (熱心な小嶋陽菜ファンだと知っているの) やはりニャンニャン (小嶋陽菜) ですか?

A: 板野友美さんでした。

Q: えっ。

A: 偶然出会ったんです。初期の AKBINGO (2008 年 10 月放送開始のバラエティ) という番組で。彼女はとてもきれいだと思いました。

Q: なるほど、彼女の外見に惹かれたのですか。あなたは板野さんや小嶋さんを推していたのですか。どんな方法で応援しましたか? CD やグッズの購入、総選挙の投票をしたり、日本にコンサートや握手会に来たりなどしましたか?

A: CD やグッズを買ったり、総選挙の投票のために募金に応じたりしました。(前説で記述したように、募金は各メンバーの応援会がそれぞれに行い、寄付金を集約して大量に投票権を購入し、応援

会として投票する。このプロセスの巧拙や成否が総選挙での順位に大きく左右する。)

Q：CDを買ったのは(封入されている投票券を使い)自分で投票するためですね。AKBやSNHを応援するために1年あたりお金をどれくらい使いましたか？

A：そうです。CDを買ったり、募金に応じて寄付をして投票したんです。AKBにはそれほど多く使っていません。数千元(3千元とすれば、日本円で5万円余り)です。SNHは恐らく10万円(約170万円)位です(苦笑)

Q：タニマチ(パトロン、大ファン)ですね！

A：劇場チケット数百回分ですぐ3万円くらい行きますよ(苦笑)

Q：AKBやSNHのファンになってから日常生活や意識の上で何か変化はありましたか？

A：娯楽生活が豊富になりましたね。

Q：自分で特定のアイドルに投票し応援することはどんな気持ちですか？

A：アイドルのために自分の力を尽くしたいと思うことでしょう。僅かな力だとしても。

Q：私もそう思います…それから上海にもAKBの姉妹団体ができました。あの時どう思いましたか？たしか2012年にはアナウンスがありましたよね。

A：最初はSNHなんか好きではなかったんです…第一印象は良くなかったですね。写真を見ても可愛いとは思わなかった(苦笑)

Q：でもずっとハマっています。あなたは最初にシャオアイ=小艾(陳靚慧)、後にミェンヤン=綿羊(許楊玉琢)を推していますよね。彼女たちのどんなところが好きですか？

A：舞台パフォーマンスがとても優れているところです(照れ笑い)

Q：その通りですね。彼女たちのパフォーマンスは本当に素晴らしい。中国の48グループの応援会はとても特色豊かだと思います。とりわけ資金調達能力が優れていますね。日本の応援会ではほとんど募金活動は行っていません。応援会やそこの様々な活動についてどう思われますか？

A：自分でCDを買いにくい一部ファンにとって応援会の募金活動はとても良い選択だと思います。しかも応援会は募金により様々な活動ができます。募金を促進したらよいでしょう。ただし一定のリスクもあります(幹部が寄付金を持ち逃げする案件が稀に発生する)。ですから自分で合理的かつ適度な選択をすることが必要です。

Q：その通りですね。私が参加したことのあるメンバーの応援会でも幹部同士が不和で分裂しているようです。募金や投票は公正に行われているようですが。この十年近くあなたはAKBやSNHのアイドルを応援したり、彼女たちと交流したり、応援会の各種活動に参加したりしてきたわけですが、ここから学んだこともきっとあることでしょう。どんな収穫がありましたか？

A：その実ファンコミュニティは一つの社会のようなもので、一人の学生にとっては、前もって社会に足を踏み入れたようなものだと思

ます。少しビジネスのやり方を学びましたし、他者への接し方や処世術を学びました。

Q：素晴らしいですね。では最後の質問です。これは少し抽象的な話題ですが…あなたにとって、「劇場」や「アイドル」とは何ですか？

A：劇場は私にとって同好会のラウンジでしょうね。なぜかといえばここで多くの人に会いましたし、皆は同じ趣味を持っていて、同じアイドルを応援して一緒に様々な思い出を作りましたし。

A：アイドルはといえば、私にとって一種の信仰、プラスのエネルギーをもたらす信仰ですね。彼女の成長を見ていると、私はとても幸せな気持ちになるんです。

Q：ありがとうございます。とても参考になりましたし、あなたのお話に感動しました。

A：私たち女の子がアイドルを追っかけるのはわりと単純なんです。ほんとうにアイドルの子たちは立派ですよ。

(以上)

自分の支援なしには推しメンはアイドルとして浮上できない。ここにファンの自己肯定感の立脚点がある。Bさんへのインタビューからも中国の若者たちにとって日本発アイドルのメンバーそして現地姉妹団体(正確に言うと「元」姉妹団体)の劇場が心の拠り所となり、日常の居場所になっていることが見て取れるだろう。Bさんは、ファンコミュニティは一つの社会でありビジネスや交際・処世を学んだと述べている。そしてアイドルはプラスのエネルギーをもたらす信仰だとすら述べている。この点で前掲のAさんと共通している。つまり、これこそ養成型アイドルグループとファンのインタラクションがもたらすインフォーマル教育(学習)の可能性を説明する鍵概念ではないだろうか。

おわりに

以上、本稿ではアイドルグループの成立に伴って発生したファンコミュニティの側に比重を置いて論考してきた。第1節では本研究のフレームワークとなるノンフォーマル教育(学習)及びインフォーマル教育(学習)の概念を整理し、なぜその考え方がアイドルグループの活動やそのファンコミュニティにも援用できるのかを論じた。第2節では、応援会活動の詳細な検証を通じて、そこに相当高度な社会性を見出すことができた。第3節では応援会を構成する二人のファンへのインタビューを通して、アイドル(グループ)との関わりを通じた自己形成の在り様を検証した。言い換えれば、これこそがインフォーマルな教育であり学習なのである。

中国は日本とは比べ物にならないほど苛酷な受験戦争

があり、そのレールに乗ることができなかつたりドロップアウトしたりした若者の中には厳しい現実が待ち構えている。大学を卒業できても実社会へ出れば厳しい生存競争が待っている。そこで自己肯定感の喪失やアイデンティティの拡散に悩む若者も多いのだ。中国青少年にとって日本発アイドル文化に関わるとは、ある意味でボランティアの顕現である。自分の応援活動や募金・寄付の活動への参加、そして投票による特定アイドルへの応援。それによって喜ぶメンバーや仲間のファンの姿を見ることがファン自らを成長させるのである。

謝辞

本稿は平成 27 年度に採択された科学研究費助成事業(挑戦的萌芽研究)採択テーマ「日本発アイドル養成と中国青少年の主体形成に関する実証的研究」(課題番号: 15K13216)の成果の一部として執筆したものである。助成に対し心から感謝申し上げます。

註

1) 登坂学 (2015)「中国における日本大衆文化の受容と可能性に関する一考察——アイドルグループの誕生と成長をめぐって」『九州保健福祉大学研究紀要』16,77-87. 及び、登坂学 (2016)「中国青少年にとっての日本型アイドル養成団体の意味及び関係性に関する一考察」『九州保健福祉大学研究紀要』17,49-58. 本研究に係る学会発表として、「日本型アイドル文化の越境と中国青少年に与える影響に関する一考察」九州教育学会第 68 回大

会、2016 年 11 月 27 日、於：熊本大学。及び、「中国における養成型アイドル団体とファンコミュニティに関する一考察」日本現代中国学会西日本部会研究集会、2017 年 6 月 10 日、於：熊本学園大学。

2) 宮本直美 (2011)『宝塚ファンの社会学』青弓社

3) 浅野智彦 (2011)『趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店

4) 「生涯学習研究 e 辞典」渋谷英章氏の解説) 及び(山内祐平・山田政寛編 (2016)『インフォーマル教育』ミネルヴァ書房, p8) より。

5) 赤尾勝己 (2015)「生涯学習社会におけるノンフォーマル・インフォーマル学習の評価をめぐる問題— ユネスコと OECD の動向を中心に—」『関西大学 教育科学セミナー』46,1-16.

6) SNH48 公式ウェブサイトより引用。

7) 以下の日本語のミックスは参与観察のなかで徐々に記録し、聴き取れない部分についてはファンに尋ねたりネット情報を参考にしたりして記述したものであり、特定の書物を参考にしたものではない。

8) 中国語のミックスについては次の情報を参照した。「snh 剧场里那些聚聚都在喊什么咒语？」ネット上の質疑応答サイト「知乎」(中国版「ヤフー知恵袋」のようなもの)

<https://www.zhihu.com/question/46882885/answer/103336183> (2018 年 8 月 12 日)

9) 2018 年 10 月 15 日、QQ (中国のチャットアプリ) を用いた筆者の応援会幹部に対する聴き取りによる。

10) 2018 年 10 月 15 日、QQ を用いた筆者の応援会幹部に対する聴き取りによる。